浪花節は天理教
淨瑠璃は佛教

樋口虎之助

舊友其中堂名門二君は明治四十年頃、いろ〳〵信仰の事から宗教、藝道の事に及べる隨分長い手簡を越したが、その中に、浪花節を天理教——淨瑠璃を佛教に喩へ、いづれもその生育ちから、難行苦行を遂げ、立派な宗教、藝道の經路まで精密に叙述されてあつた。中には嚴格な教訓かと思へば諧謔來りて抱腹絶倒せしむることもあり、茲にその一節を抽出せんに

デロレンが進化して浪花節となる、おみき婆々變して教祖となる、泥鰌動けば榊が震ふ

此の奇端に畑を供出、田を放り出し、山を賣り、家藏財寶を奉納して助け給へと天理王命を信仰する。此の怪宗教が發達するに隨つて、世の知識學殖が丹波市に集り、信者が雲の如く大和の天を蓋ふといふ賑盛さを、面白可笑しく描寫されて天理教が人間の心理を籠絡するの妙を稱揚してゐる。

元來浪花節には文辭も典型も約束もなくたゞ口から出まかせの法螺左衛門が發達して立派な作者を提へ、漸次上膚に喰ひ入る計靈が奏効し、街頭藝人と侮蔑した吉田辰丸が東都八丁堀に看板を掲げ、日本一の竹本越路大夫その人氣は全く東都を壓してゐたが、それすら蹴散らしたのは明治廿年頃であつた。

爾來傳統のみに依存して研究改善を忘れてゐた淨瑠璃は日一日と萎靡凋落し、文樂近松と並び競爭してゐたも、大隅の病氣が因となり或者の策謀が利いて近松は沒落、文樂の獨り天下となつて文樂萬歲と思ふたのは棟喜びで、繁昌すべき文樂が辛ふじて興行を持續せるに過ぎない狀態。しかも女義大夫席は疾に廢滅して據る所を失ひ、三十有餘の素人大會も掌をひそめ、日本會、倭會のみとなつた、その由つて來るところ果して如何。

元祖義大夫は常に研究を忘らず「日々新に進め」と訓へたりと聞く、竹本政大夫すなはち二代目義大夫は新發展に努めた。何々型、何々流などの流儀は千載不變のものではない、より以上、理に適ひ情に合し、文意を顯はし人を感動せしむるものあらば何時執つて替へても差支へなく、そこに進歩があつて淨瑠璃は日々に興隆するのである。元祖の高教が實踐躬行せられ、其の理念が世界に擴充されて始めて元祖への孝行となり報國ともなるのである。京阪神その他各地にある氣息奄々たる夥多の佛閣は果して吾人に何を語るものありや。

社會の步調と共に改善進步を疎んずる者に對する無類の見せしめではないか、佛教と淨瑠璃の趨勢斯の如く酷似せるは佛教を母體とする淨瑠璃なるが故でもない。全く幾萬の僧侶達、八家九宗と別れて何を爲し

來つたか、念ひをこゝに到して何の顏せあり て宗祖に對せんとするものぞ。また三業一體に如何ほど阿吽の呼吸が合致しても、それが社會の上に實効を現すも萬衆の歸依敬服せしむるに足らずんば、如何に尊重すべき日本唯一の古典藝淨瑠璃節と雖も、時代即應の浪花節を評して、浮れ節とかデロレンなどと蔑視するは筋の立たぬ話である

鶴澤友造の弟子が清元に走つたり、中には出家したものも一人ある、或は本業の大夫が芝居の太夫に轉じたのも三人や五人でない、名家鶴澤小勇も產業士となつたではないか、近くは竹本長尾大夫が芝居に轉じた。吾人は、日本因協會は斷然芝居出動を認容せよ、と提言する、總じて協會の會則には時代錯誤の個所が多く、それが松竹會社の成すことに反對せられぬ理由があるならば、日本因協會は敢然として速かに協會規則を改むべし。

、天理教は浪花節でもデロレンでも大東亞戰には銃後の御奉公として、飛行機資金も續々と獻納し、教會の熱意は賞讃するに足る。佛教團も之に劣らず銃後の奉仕に最善を捧げてゐる熱意は認めてゐるが、天理教に遜色あつては弘法大師や親鸞聖人や日蓮上人に對して面目ない。わが淨瑠璃界に於て吾人寡聞なるも古靱大夫が千有餘金、鴻池拳城が千、黑田喜室が千三百金を軍需資金に特志家あつたに過ぎざるは遺憾である之を以て赤誠の程度を評價するのではない各家庭に於ては種々の名目の下に銃後國民としての赤誠を捧げつゝあることは確信するも、此の際、因會各大會が發起して飛行機淨瑠璃號獻納を計畫しては奈何、其の語る忠君愛國、友愛敢闘の眞意が中外に宣揚せらるゝであらう、恐らく本誌は此の壯擧に協賛し其の機關たることを快諾すべく誓ふものと確言する。

日本因協會が春秋二季に行ふ淨瑠璃神社祭典なるものは極めて淡々然昧々然たるものである、單なる類列べでもあろまい、此の機會を利して淨瑠璃の時代即應策を講じ斯道勃興に全力を傾注せねばならない。

鹿擦相剋を防止すべき淨瑠璃界（神戸、九州方面）に除名とは何事ぞ、政府は道德上、常識上、人道軌範を逸せざらん事を示唆教訓せられてゐる。社會教育の本家を以て任ずる淨瑠璃に皮肉な垂示である、直ちに政府の教訓に同化翼賛し、大東亞建設のために盡瘁せんことを切望する。

米ル・英チヤの愚痴

久野仙雨（即興）

「三十三所壷坂寺の段」

見當違ひの、目算と、なすりやつてゐる中に、情けなや英國は、生れもつかぬ、キズだらけ、勝ち目も見えぬ、其の上に、瀕死に迫れど上の空、一旦負けると負け癖がついて火の中、水の底、未來までも、地獄ぢやと、思ふは眞實これ申し、お前の迷夢癒さんと、あゝ亡國の鐘を聞き、そつとぬけ出でたゞ一人、空路、いとはず來たものを、ちつともねつから御利生の、ないとはいかなるむくひぞや、觀音さんも聞こえぬと、今も今とて恨んでゐた、私の心も知らずして、カナダへ逃げて來るやうにと、今のお前の一言が、私は腹が立つわいのと、くどき立てたる英國の、心のうちぞあはれなる。

米英を倒す戰費だ　此の貯金